山稜の読書家

島田巽著

茗溪堂

島田　巽（しまだ　たつみ）
1905年，東京生まれ，慶応義塾大学卒業。朝日新聞社友，日本山岳会名誉会員。
著書　『ふだん着の英国』（1955年　暮しの手帖社刊）
『山・人・本』（1976年　茗溪堂刊）
『遙かなりエヴェレスト―マロリー追想』
（1981年　大修館書店刊）ほか。
訳書　『わがエヴェレスト』E. Hillary: *High Adventure* を松方三郎氏と共訳（1956年　朝日新聞社刊）
『カンチェンジュンガ―その成功の記録』C. Evans: *Kangchenjunga: The Untrodden Peak* の訳（1957年　朝日新聞社刊）ほか。

山稜の読書家
一九八五年九月
定価　三、九〇〇円
著者／島田　巽
発行者／坂本　矩祥
印刷／猪瀬印刷KK
発行所／東京都千代田区神田駿河台二の一／株式会社茗溪堂／☎東京二九一局九四四二／振替東京八―二四七二三

山稜の読書家　目次

爽やかな山想……1
山稜の読書家たち 3
『スウィス日記』への思慕 12
二つの木暮碑 21
ヘディンと松方少年 27
二人のバドミントン派 31
地図をめぐって 39
ティルマン、シプトン etc.……47
探検の生涯——H・W・ティルマンのこと—— 49
シプトンのカラコルム 57
シプトンとハント——エヴェレスト遠征余話—— 68
シプトン追悼 76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宿命のエヴェレスト――一九八二年――　80
再び慰霊のケルン　80
ボードマンを惜しむ　86
トム・ペイティの山と文　96
自伝の味・評伝の味……109
登山家と自叙伝　111
ヒラリーの自伝　*Nothing Venture, Nothing Win*　125
ハントの自伝　*Life is Meeting*　130
烏水・半生の評伝『小島烏水――山の風流使者伝』　136
山岳写真の先駆者たち　144
山の去来する日……157
奇妙な取合せ　159

早春・好日のあと　164
旅中の連想――イタリアで――　170
紅一点　178
苔のつかない歴史――ニュージーランドで――　181
山友を偲ぶ　186
藤島敏男さん　186
小池新二さん　192

烏水、ウェストンのころ……197

山と本とその時代――山岳名著の覆刻によせて――　199
烏水・晩年の里程標　213
『アルピニストの手記』――覆刻によせて――　213
ウェストン追想　227
『日本アルプス―登山と探検』――原著覆刻によせて――　227

『極東の遊歩場』――原著覆刻によせて――　236
略年譜　248
略年譜づくりメモ　260

寸描・寸評

265

著者寸描　267

烏水の描く人物像　267
三田さんと『わが登高行』　271
小谷文庫のエネルギー　274
貴重な山岳史家・山崎君　276

読後寸評　279

『山は満員』（渡辺公平）　279
『わたしの草と木の絵本』（坂本直行）　281
『旅の山菜』（片岡博）　283
『ヒマラヤ取材記』（片山全平）　284

八千メートル峰の編年誌 *Sivalaya. 8000-metre Peaks of the Himalaya* 287
アーヴィンの謎 *The Irvine Diaries* 289
エヴェレスト登攀全史 *Everest* 291

ある朝の回想

ある朝の回想 297
『燈火節』の片山廣子さん 297
少林山のタウト夫妻 304
雪後庵の傘 311
イタリアの友と遷宮祭 317
笠さんと『なくてななくせ』 323
小泉先生のコラム 328
小泉家の「室内楽」 333
恩師との縁 337

記憶のページ……341
万太郎先生のロンドン　343
観劇の日々　343
意外な出会い　354
三田春秋　363
卒業五十年・日吉で　363
自然保護のために　366
省エネルギー　369
研修・西と東　372
カンにさわる話　375
あとがき　378

爽やかな山想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山稜の読書家たち

一九八三年の初夏、日本山岳会の集まりで、「マロリーの本、ドウラギリのキャンプで読みましたよ」と声をかけられて驚いた。

声の主は、ネパール・ヒマラヤから帰って、まだ二、三ヶ月しか経っていない安間荘君で、雪焼けの残る笑顔であった。同君は北海道大学山岳部・山の会ヒマラヤ遠征隊の隊長として、一九八二年にドウラギリⅠ峰に挑み、十二月十三日、一隊員とシェルパ一名を八一六七メートルの山頂に立たせた。初登頂ではないが、そのころ各国の登山家たちが狙っていた、八〇〇〇メートル級の巨峰への厳冬期登頂にみごと先鞭をつけた点で、高く評価されていた。

最も苛烈な自然条件の下で、この成功をもたらした主因の一つは、ホームグラウンドの北海道の山で、雪中生活の経験が豊富であったため、高所のキャンプを雪洞方式にして効果を挙げたことだと、安間隊長

は述べている。そして主因の第二は、遠征隊員に理科系学部の出身者が多く、科学的技法の採用が容易だったことだという。とくに厳冬期には、気象の変化を的確に予測することが必要なので、情報の受信用に、重さ五・五キロの太陽電池を運び上げたのが役にたった。

この太陽電池は安定した出力を保ち、最大八〇ワットに達した。それを自動車専用バッテリーに充電、気象情報のファクシミリ受像はもちろん、トランシーバーやベース・キャンプの雪洞で照明用螢光灯にも利用したというからすごい。

このようにユニークな輝かしい記録を、ヒマラヤ登攀史に加えてきたばかりの安間隊長から、冒頭に記したような声をかけられたのだから、私としては驚くほかなかった。同君が読んでくれたという私の本は、一九八一年の暮に刊行の『遙かなりエヴェレスト―マロリー追想』と題したもので、エヴェレストで消息を絶ったジョージ・リー・マロリーの三十八年の生涯を顧みる、私なりの評伝であった。

こんな小著を、ネパール中央部の山奥、しかも、ベース・キャンプでさえ五七四〇メートルもある高所まで、持ってゆかれたのだから、ありがたい話である。なにしろ私自身よりも著書の方が、はるかに高いところまで登らせてもらったというわけだ。

その上、こんな高所のテントか雪洞の中で、内容に眼を通してもらえたのだから、著者として、まさに冥利に尽きるというほかはない。安間隊長の手記によると、厳冬期の烈風は、大型ジェット機の轟音なみ

の山鳴りを起こし、テントや荷物箱を吹き飛ばすほど荒れ狂うという。これでは本など読める状態ではなかったろうし、たまに静穏な日が訪れれば、登攀活動の采配をふるのに多忙をきわめたにちがいない。そういうなかで、よくぞ読んでもらえたと、感にたえない想いである。

登山家たちの遠征中の読書については、かねがね関心をもっていたので、小著のなかでも、私はマロリーの読書について記しておいた。なかなかの読書家であったマロリーは、三回にわたるエヴェレスト遠征の折、その都度かならず幾冊かの本を携えて出かけている。一九二二年の第二次遠征には、登攀中に二冊の小型本が大変役にたったと、彼みずから遠征報告のなかに記している。その二冊というのは、一つは当時の桂冠詩人ロバート・ブリッジスが編んだ詞華集 *The Spirit of Man* 他の一つは、シェイクスピアの全集のなかの「ハムレット」と「リア王」の巻であった。

この第二次遠征では、マロリーはハワード・サマヴェルとともに、頂上攻撃の拠点となるノース・コルまで登った後、その基部にあたる六四〇〇メートル地点に設けた第三キャンプで三日間をすごした。携えた二冊の本は、「この高度では万人むきとはいえないが、サマヴェルと二人では、大いに楽しむことができた」とマロリーは記している。ブリッジスの詞華集のなかの詩を、かわるがわる朗読すると、エヴェレストについて意外な理念を見いだして、その夜は心地よくすごせたし、シェイクスピアの戯曲も、せりふを交互に読みあげると、だんだん熱をおびていったという。

たまたま二人は共にケンブリッジ大学の出身だし、サマヴェルは外科医だが、絵も巧みで、作曲もたのしむ多才な人柄だったから、六〇〇〇メートルを超える荒涼たる高所で、こんな知的なすごし方ができたのだろう。

マロリーは知的な性格とともに、ひどく生一本な正義心の持ち主でもあったようだ。大学時代には、フェビアン協会に加わって、伝統的な社会悪の撲滅に若い情熱を燃やしていた。当然このようなマロリーの一側面にも、私は触れておいたが、小著を読んでくれた安間君が、こういう活動に加わっていたマロリーに、とくに共感を覚えたと告げられたので、これまた私は驚いた。

理科系の多い遠征隊で、隊長自身も地質専門の技術士なのに、すでに歴史のなかに遠のいてしまったフェビアンの運動や、その社会改良運動に熱中するマロリーの姿に、関心を示されたとは、著者として実はうれしい驚きであった。ことに、それが書斎のなかでの読後感ではなく、想像を絶するきびしい状況のなかでの反応であるだけに、私に与えられた示唆も浅いものではなかった。登攀という激しい行動と読書という静的な行為、その両者のかかわり合いには、実に意外で微妙なものがあるようだ。

アルパイン・ブックスをひもといていると、遠征登山の途次、こんな本を……と思わされるような書物に読みふける人たちの姿を見ることが意外に多い。読書とはもともと個性的なものだから、携えてゆかれ

るものが多種多様なのは、むしろ当然至極のことであろう。書物を求める心の動きも、人それぞれ異なるわけだから、新刊の幾冊かを選んでゆけばすむという性質のものでもない。結局は、かなり選びに選んだ上での何冊というのが、お決まりのように見える。

だから、山稜や山麓での読書は、私たちが想像しがちな軽いものとは限らない。現にドウラギリでの安間君にしても、私の小著のほかに、タキトウスの『ゲルマニア』を読んでいたという。一九〇〇年近くも前のローマの史家が、原始ゲルマン人を観察した文字通りの古典をである。

「カエサルの『ガリア戦記』から二百年後、ネロの爛熟したローマからみた新興ゲルマニアを、透徹した歴史家の目が生き生きと描いて、面白く読みました。」

と安間君から伝えられて、私などは驚き入るばかりである。

パミールのガルモ峰で四十五歳の生涯を終えたウィルフリッド・ノイスについては、たびたび筆をとったので詳しくは触れないが、彼など山稜の読書家としては、屈指の一人ではなかったかと私は思う。エヴェレスト初登頂の折の私的体験をつづった *South Col* は、名著として知られているが、「死のにおいがする」という高度八〇〇〇メートルのサウス・コルで、登頂のヒラリーたちのサポート役を果したノイスは、第四キャンプまでくだって、久しぶりに書物を手にした。

さきにベース・キャンプから登ってゆく間、読みつづけてきたのはチャールズ・ディケンズの小説 *The*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com